



COCO

Community & Cooperative

No.49

2019年3月31日

発行所 / COCO湘南

〒252-0804 藤沢市湘南台 7-32-2

Tel:0466-46-4976

Fax:0466-42-5767

発行者 / 大江守之

COCO湘南のHP

www.cocoshonan.org/



「新しい時代」に向けて

NPO法人COCO湘南

副理事長 関水秀樹



平成の時代が終わろうとしています。「新しい時代」を迎えるにあたり、未来を志向するとともに時代を振り返ることにも意味があると感じています。

わたしたちのCOCO湘南は、特定非営利活動法人として1999年、平成11年に設立され、今年で設立20周年の区切りを迎えます。

高齢社会における高齢期の新しい住まいと暮らしの在り方として自立と共生を理念とする共同生活・グループリビングという考え方をもとに地域での自立した生活を目指し、創設者である前理事長の西條節子さんのもとに集まつた多くの心ある人々により全国に先駆けてCOCO湘南台の試みと実践がスタートしたのです。

COCO湘南が設立された翌年の2000年には、超高齢社会において介護の社会化を目指す公的介護保険制度が創設されたことは意味のある「偶然」といえるのかもしれません。その後のCOCO湘南の在り方は、グループリビングの成功モデルとして全国的な注目を受け続けており、現在でもしばしばマスコミにも取り上げられていることは周知のとおりです。しかしながら、時代は、急速に変化しています。COCO湘南にも、その変化に対応していくことが求められているのではないでしょうか。

その変化のひとつが居住者の加齢に伴う「介護」に関するものです。自立と共生を目指すグループリビングにとっても避けて通ることはできません。

次に、「経営」に関するものです。COCO湘南の設立に向けて検討を重ねてきた研究会が考案した現在の「経営」モデルは、20年の時の経過を経て見直す時期になっています。そして、いまや「有料老人ホーム」や「サービス付き高齢者住宅」など、高齢者の住まいが多様な主体により提供されるようになり、意識するとなじみの「グループリビング」は、それらとの「選択・競争」に直面しています。そこで、これらに対応していくためにCOCO湘南では介護サービスとの連携や新たな住まいの在り方、住まい方などの模索や「経営」に関する議論が始まっています。それらをさらに充実するためには、居住者の理解と協力のもと法人の役員だけでなく、これまでCOCO湘南を支えてきた会員や賛助会員、事務局やライフサポートーをはじめとする多くのボランティアや関連する分野との協働が欠かせないように思います。

昨年5月の総会以降、大江理事長のもと新しい理事の参加を得た新体制で取り組んできた新しい食事の提供の在り方も定着してきたように、ひとつひとつ着実に「新しい時代」への取り組みを実現していくことが大切です。そのためにCOCO湘南が歩んできた20年の歴史を総括しながら「新しい時代」に向か理事会メンバーのひとりとして任期をもとに、これらの対応に取り組んでいきたいと考えています。

COCOたかくらの居住者と暮らし

COCOたかくらの居住者、ライフサポーターに
グレープリビングの暮らしや魅力について、お話を聞きました。

体操とお茶の時間

COCOたかくらでは毎日お茶と体操を楽しんでいます。
体操はライフサポーターがリードしています。
「肩こりが楽になりました」
「体が軽くなりました」
「用事がある人も多く、集まってる人が一人、二人の時もあるけど、個人指導でやってください。運動後は、お茶をしながら雑談しています」。



自然とのふれあい

COCOたかくら周辺は、庭のある家や神社があり、少し歩けば川の土手を散歩することもできるなど、自然に恵まれています。
「朝、神社のあたりを毎日歩いてる方もいました。桜の咲く季節にはお弁当をもって土手に食べにいくこともありますし、近所の人が桜の枝を届けてくれることもあり、それを囲んで食事をすることもありました。最近は土手に土筆をとりに行き、みんなで料理をしました」(ライフサポーター)



たすけあい

お互いにたすけあっています。
「清宮さんは日曜日ライフサポーターがないときはお風呂の掃除をしてくださる。みんな自分でできることを仲間のためにやろうといい雰囲気がある。皆さん大人だからどうやって協力すればいいのかなと考えている。この人は病気だからこうした方がいいとライフサポーターが率先してやってくれるのでそれにつられて居住者の皆さんも出来ることをやってくださる」(熊沢さん)



近所づきあい

知らない人でも挨拶をかわすような地域です。近隣の方がいろいろとサポートしてくださっています。
「この前、家の前の人が沈丁花の花をくださった」(熊沢さん)
「雪が降った後、一人雪かきをしていたら、近所の家から大勢人が出てきて手伝ってくれたことがありました。近所との関係はうまくいっています」(ライフサポーター)
「そんなへっぴり腰でやたらだめよ、と近所の雪国出身のお婆さんが雪かきを手伝ってくださいました」(田中さん)
「野菜を持ってきてくださる方もいる」(熊沢さん)
「この辺りでは近所の人に合うと、知らない方でも皆さんご挨拶してくださる。見知らぬ子供もすれ違うと「こんにちは」と言ってくれる。この辺りは学校の教育がいいんだなと思いました」(田中さん)



趣味

居住者は、様々な趣味を持っています。他の居住者の趣味から刺激を受けることもあるようです。
「家の前に絵の先生がお住いで、以前は絵を習いに行っていた人もいた。先生が手作りのお菓子を作つてお茶をご馳走してくださる。ずいぶん長い時間行かれていた。先生は介護ニーズが高くなつても受け入れてくださった。市民ギャラリーで展覧会があつた時は、みんなで見に行きました」(ライフサポーター)
「私が作品をアトリエでつくつてると、大工仕事のようなものなのでうるさくなる。でも皆さん寛容で何もおっしゃらない。作品が出来上がつた時に田中さんが俳句を作つてくださった。“造形はセンスと力の秋の展”。作品の裏に記しました」(熊沢さん)
「造形は大工仕事すごい。センスがあつてとても素敵なのね。とてもいい作品でしたよ。力強いな、と思った。熊沢さんが作品を作つていてのを見て、一句思いつきました」(田中さん)
「作品をつくつてる時、通りがかりに皆さん感想を言ってくださるので、励ましになる」(熊沢さん)
「作った俳句をみんなに見てもらい意見をもらうことがあります」(田中さん)



自由

「先日、昔住んでいた札幌に10年ぶりに一人で尋ねました。88歳で一人旅は無謀だと思っていましたが、移動のたびに声をかけてくれるシステムになっているのでしょうか。飛行機も最後まで座つていてくださいと言われ、迎えに来てバスに案内してもらい助かりました」(田中さん)

「みんなで田中さんが無事に帰つてくるかどうか心配していました。そういう雰囲気がここにはあります」(熊沢さん)



家族

家族の方が来られるのもウエルカムです。ゲストルームがありますが、居住者と同じお部屋にも宿泊できます。

「○○さんは以前入院されたことがあった。心配された妹さんが来られて、同じお部屋に泊まれ、一緒に夕飯を食べた。話題豊富な方で楽しかった。こんな素敵な家族をお持ちなんだなと思った。帰り際にここはいいところね、とおっしゃってくださいました」(ライフサポーター)

部屋

部屋の広さは25m²でゆったりしています。
「生活に必要な家具や家電製品も無理なく配置できるスペースもあり、一人で住むには、適切な広さだと思います。私の部屋は2階にあるので太陽が出ている間は暖房なしで過ごせます。静かなこと、この上なく満喫しています」(板橋さん)



終末とお墓

終末やお墓について、みんなで話し合っています。
「○○さんと○○さんは北海道出身で仲がいいのだけど、最近、偶然お墓も一緒のところを買つているのがわかつた」(ライフサポーター)

「板橋さんが終末の自分の対応をいろいろと考えている。ここにいるとそういうことが参考になります」(熊沢さん)

「3年前、終末期の話をしていたら、一番高齢の93歳の人が、私はまだ死ぬことなんて考えられない、とおっしゃっていた(笑)」(ライフサポーター)



ライフサポーター

ライフサポーターの亀井さんと洋子さんはとても明るい方です。

「ライフサポーターの人が明るくて大きな声でいろいろお話されるので、雰囲気がいい」(熊沢さん)

「私たちがいない日曜日は寂しくてしょうがないという人もいる」(ライフサポーター)

居住者との関係

ふれあいのある刺激的な生活、適度な距離をもちつつ、つながりを持っています。
「COCOたかくらでは、私が最後の居住者です。隣人である皆様との関係は良好だと思います。個性的な方々との毎日は刺激もあり、人生の勉強もさせていたいだけ、ひとそれぞれのドラマを感じており、個性を活かし程ほどの距離を保ちつつ良い関係であると思っています」(板橋さん)



3

入居者募集中 COCOたかくら 2名 問合せ先 TEL 0466-46-4976

安心

入居前は一人暮らしの孤独感や不安感をお持ちだった方が多いようです。

「糸野さんは3.11の時地震が怖くなつたので入居された」

「2階建ての家に一人で暮らしていた。遅く帰つてくると、誰かいるんじゃないのか、とか不安になつた。台風が来れば怖いし。ここは一緒に住んでいる人がいるから安心」(熊沢さん)

「清宮さんはお若いのにどうして入つたのと聞いたら、家に帰つても真っ暗なところに帰つてくるのは嫌だから、みんなの気配あるところに帰りたい、とおっしゃつた」(ライフサポーター)

「以前住んでいた時に2回ほど泥棒に入られたことがある、ここは人がいるから安心」(糸野さん)

「笑い声、食器の重なる音、野菜を切つてゐる音が聞こえてくるのがいい。みんなガチャガチャやつていてことに関して文句を言つてはいけない」(熊沢さん)

「私は歩き方がバタバタしているから、洋子さんだと思ったわ、と言われる」(ライフサポーター)

川崎シンポジウムを開催しました。



基調講演

3月30日、31日にNPO法人暮らしネット・えん主催、グループ・プリビング運営協議会共催で川崎シンポジウムを開催しました。

3月30日は川崎市にある3つのグループ・プリビング、おでんせ中の島、COCOせせらぎ、COCO宮内の見学会を行い、建物の見学とともに、運営者や居住者の話を聞きました。25人の参加がありました。

3月31日は川崎市国際交流センターにて、シンポジウムを行いました。40人の参加がありました。基調講演は、上智大学栢本一三郎先生に「クオリティ・オブ・デス＆ダイイングからみたグループ・プリビングで暮らすということ」をテーマにお話しいただきました。その後、「セクションI 高齢者グループ・プリビングと共同性」、「セクションII 高齢者グループ・プリビングの居住とケア」をテーマに運営者や研究者の講演やディスカッションがありました。

参加者は、グループ・プリビング運営者、スタッフ、居住者、研究者、これからグループ・プリビングを作りたい人など様々な方がいらっしゃいました。

川崎シンポジウム講演内容

基調講演

クオリティ・オブ・デス＆ダイイングからみたグループ・プリビングで暮らすということ

上智大学総合人間科学部教授 栢本一三郎

セクションI 高齢者グループ・プリビングと共同性

司会 小島 美里 (NPO 法人暮らしネット・えん)

- | | |
|----------------------------------------------------|----------------------------------|
| ● 10年目リビング1号館と リビング2号館開所で学んだ共同性の課題 | 井上 肇 (NPO 法人結いのき専務理事) |
| ● 広がるたすけ愛の輪 | 星川 光子 (NPO 法人いぶりたすけ愛理事長) |
| ● グループ・プリビングを支える共同性 —さくらと法隆寺の事例から | 宮野 順子 (京都光華女子大学短期大学部ライフデザイン学科講師) |
| ● グループ・プリビングを核としたコミュニティ形成 —COCO宮内の運営主体の事例研究を通して | 土井原 奈津江 (慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員) |

セクションII 高齢者グループ・プリビングの居住とケア

司会 大江 守之 (慶應義塾大学名誉教授・NPO 法人 COCO 湘南理事長)

- | | |
|----------------------------------------------|----------------------------|
| ● 高齢者生活とグループ・プリビングの課題 —ケアと自己実現の欲求に関する一考察— | 中西 真弓 (神戸山手短期大学現代生活学科教授) |
| ● 高齢者シェア居住の居住者相互のケアと運営 | 近兼 路子 (慶應義塾大学大学院社会学研究科) |
| ● 高齢者グループ・プリビングにおける、 最期までの居住保障の実態と要件(1) | 林 和秀 (立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科) |
| ● 高齢者グループ・プリビングにおける、 最期までの居住保障の実態と要件(2) | 小島 美里 (NPO 法人暮らしネット・えん理事長) |

COCO湘南台にお花が咲きました



高齢者グループプリビング普及活動 2019年1月～3月

12月7日 大阪から将来GLを作りたい方がCOCO湘南台にいらっしゃいました。

1月7日 共生の住まいに関心を持つ東京の方がCOCO湘南台にいらっしゃいました。

編集後記

最近、身近なグループプリビングで、認知症居住者の対応に接することが続いた。ケアが目的でないグループプリビングの課題の一つは認知症などで介護ニーズが高くなった時の対応である。その時になって運営者、居住者がお互いに納得できるためにはどうすればいいだろう。優先されるのは本人の意向である。しかし、認知症になった時に適切な判断が可能なのだろうか。自分がもしそうなったとき、どのようにしてほしいか、意向を明確にしておくことが必要なのではないか。この課題について、居住者同士、運営者と居住者がみんなで話し合う場があるといい。住まいが提供できるサービス、さらに生活の質を保ち共同生活を維持するために必要なサービスとその費用など経済面を含めた情報が整理されれば、その時の対応を考えるベースになる。しかし、地域のサービス内容や費用も変化する。そう考えるとこの課題を頻繁に考えることが必要だろう。（な）

編集者 *大江守之
熊澤淑子
青木静恵
土井原奈津江